

主 題：勝利者らしく生きる

聖書箇所：コリント人への手紙第一 15章57-58節

今日、私たちはコリント人への手紙第一をごいっしょに見たいと思います。

イギリスにこのようなことわざがあります。「我々は泣きながら生まれて、文句を言いながら生きて、失望しながら死ぬ。」と。確かに、世の人々はそうかもしれません。しかし、私たち信仰者は違います。そのような生きている人々と私たちを比べたときに、私たちは何と幸いな者かと思いませんか？確かに、私たちは泣きながら生まれて来ます。でも、文句を言いながら生きるそのような人生は終わって、感謝しながら生きる人生が始まったはずです。そして、失望しながら死ぬ人生は終わって、希望を抱いて死んで行く、そのような人生へと変えられたのです。もし、私たち信仰者が神のくださったそのすばらしい祝福をしっかり理解しているなら、何度も私たちが学んでいるように、私たちの今日の生き方が変わって来るはずです。皆さん、神を喜び神に感謝をささげているかどうかということは、私たちが何を言うかでなくて、どのように生きているかによって明らかにされる訳でしょう？神に対する愛はことばではなく私たちの生き方がそれを明らかにします。もし、私たちが神が与えてくださったそのすばらしい祝福をしっかり覚えていていたら、当然、覚えている者にふさわしい歩みをしているはずですよ。人々はその歩みを見て「この人は違う、この人は私がない何かを持っている」と言うはずですよ。思い出しませんか？そのようなクリスチャンに惹かれて教会に来た当時のことを。「この人は何か違う、この人は私がない何かを持っている」と、そのように思って私も教会に来ました。その人は明らかに、神によって贖われたそのすばらしい祝福を覚えながら、感謝しながら歩んでいたのです。

ですから、信仰とは、ことばにあるのではなくその生き方に力があるのです。大切なことは、どれだけ知っているかよりも、どれだけそれを実践しているかです。聖書のみことばを見る時に、私たちが何度も神からチャレンジされることは、「あなたはどのように生きていますか？」ということですよ。「あなたはどのように歩んでいますか？わたしはこのように生きなさいとあなたに命じる。あなたはどうしますか？わたしはあなたにこのように生きなさいと命じます、あなたは従いますか？」と。また、あなたはどのように歩んでいるのかどうか、みことばはいつも私たちに問いかけます。クリスチャンの皆さん、私たちは目覚めなければいけません。私たちはもう一度主をしっかり見上げて、残されているこの地上の人生をどのように生きるのかをしっかりと決めて、神の助けをいただいてそのように歩み始めて行くことですよ。もし、そのようにしていなければ今日から始めてください。そのような歩みをしているなら、益々そのような歩みをもって「私は生まれ変わったのだ。私は神からすばらしい祝福をいただいている。私は希望をもっているのだ。」ということを目覚めに示し続けて行くことですよ。

パウロは今日私たちにみことばを通して、彼自身が生きていたその生き様を示してくれます。そして、それを示すだけでなく、私たちに対しても「私もこのように生きたのだから、あなたも同じように生きなさい」と勧めを与えます。チャレンジをくれるのです。Iコリント15:57からパウロがこのように言っていることばに耳を傾けてください。「しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。」、感謝すべきだ！クリスチャン、もっともっと私たちは神に感謝すべきことがあると言います。パウロ自身が感謝していたこと、そして、私たちにも同じように感謝しなさいと命じたことは何だったのでしょうか？それは私たち信仰者が勝利者となったことですよ。あなたがイエス・キリストを信じ、イエス・キリストの恵みによって救われ、そして、神の子どもとされているのなら、あなたは勝利者だと言うのです。そのことを喜び感謝しなさいと言うのです。私たちがそのことを考えるなら、そのことを学ばば学ぶほど、私たちは自然に内側から感謝が出て来るはずですよ。なぜなら、こんなにすばらしい祝福を神は私たちにくださったからです。

☆勝利者とされたこと

パウロはIIコリント2:14でも感謝するようにと教えています。「しかし、神に感謝します。神はいつでも、私たちが導いてキリストによる勝利の行列に加え、至る所で私たちを通して、キリストを知る知識のおりを放ってくださいます。」、パウロ自身神に感謝していました。何を感謝していたのでしょうか？「私を勝利者としてくれた、私を勝利者として導き続けてくれている。」ということですよ。一度勝利者となった者は永遠に勝利者ですよ。彼は「私には感謝することがある。それは神が私に勝利を与えてくれたから。」と言うのです。何のことでしょう？彼が様々な問題を経験してその問題に勝利した、だから、感謝していたのでしょうか？もちろん、いろいろな戦いがあったそれに勝利することを、私たちは日々経験することがあります。そして、そのことを当然、神の前に感謝し喜びます。しかし、パウロが一番感謝していたのは救いです。罪からの救いです。

A. 何に対する勝利か？

1. 罪からの勝利

救われたことを一番感謝する、なぜなら、これは私たちがどんなに頑張っても自分の力では叶わないことだからです。どんなに心を入れ替えても、私たちは自分の努力でこの救いを得ることはあり得ないことです。ヨハネの手紙第一で、この勝利に関してヨハネはこのように教えています。Iヨハネ5：4-5「**なぜなら、神によって生まれた者はみな、世に勝つからです。私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です。5 世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。**」、クリスチャンの皆さん、私たちはその罪の束縛から、罪の奴隷であったことから解放されました。サタンのしもべ、奴隷であった私たちはそこから解放されて、神の子どもとされたのです。「**神によって生まれた者はみな、世に勝つからです。**」、この私たちの信仰こそが世に勝った勝利なのです。

そうすると、私たちはそのことを日々感謝しているかどうかと、自らに問いかけて見なければいけません。恐らく、皆さんも信仰生活の中で経験されたことだと思いますが、この救いに対する感謝を失った時に、私たちの信仰は段々冷え切って行きませんか？神の恵みによって救われたということを本当に感謝しているときは、私たちはそこからいろいろなすばらしいことが生まれて来ます。感謝しているときは、私たちは喜んで主に仕えようとするだろうし、神に救われたことを感謝しているときは、私たちは神に喜んでささげて行こうとし、神のために生きようとし、主が私のためにいのちを捨ててくださった以上、私も喜んでこの方のためにいのちを捨てて行こうとするのです。ところが、その感謝が薄れるにつれて、私たちの主に対する信仰にも変化が生まれて来ます。私たちは段々最初の愛を失って、形式的な信仰者へと変わって行ってしまうのです。そのような信仰の歩みをあなたは歩んでおられますか？私たちには感謝することがある、それはこのようなすばらしい主が勝利をくださったことです。そのことを今から私たちはもう少し見て行きます。

2. 死に対する勝利

救われたということは私たちにとって最もすばらしい神からの贈り物です。しかし同時に、パウロはこの15章の中で特に繰り返してあることを教えています。それは死に対することです。ですから、彼はここで死に対する勝利に関して喜んでいます。感謝しています。55-56節には「**死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。56 死のとげは罪であり、罪の力は律法です。**」、ですから、確かに、パウロはヨハネも教えたように罪から救われて私は勝利者となったということを感じているが、同時に、彼は救いとともこの死に対して勝利したということを楽しんでいるのです。クリスチャンである私たちも同じように喜ぶのです。クリスチャンは死に対して勝利した者なのです。52-53節には「**終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。53 朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならないからです。**」とあり、私たちは生まれ変わらなければいけないのです。なぜなら、私たちは永遠の滅びに向かっていている者だからです。私たちは生まれ変わらなければならず、不死を身につけなければならないと言います。この出来事はイエスが再臨される時に起こります。

1) 死のとげは罪

ですから、先ほど見た55節「**死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。**」は、実は、旧約聖書のホセア書のことばをパウロはここで引用しているのです。そこではこのようにホセアが教えています。ホセア13：14「**わたしはよみの力から、彼らを解き放ち、彼らを死から贖おう。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。よみよ。おまえの針はどこにあるのか。あわれみはわたしの目から隠されている。**」。パウロがIコリント15：55で教えていることは、「死」という出来事を擬人化して、私たちの敵と看做して、そして、それに対して私たち信仰者は勝利したということです。「**おまえのとげはどこにあるのか。**」とパウロはそのように言って、「死」ととげを失った動物にたとえています。毒をもったサソリを思い出してください。その毒針は毒がなければ怖くありません。「とげ」がなければ怖くはありません。同様に、死という動物も、その「毒針」、「とげ」である罪がなければ恐ろしくないとパウロは教えたいのです。「**死のとげは罪であり**」と言いました。何のことでしょう？今、話したように、「とげ」が私たちに痛みを与えるのです。「とげ」が私たちに苦しめるのです。蜂に刺されたならそこに痛みがあります。「とげ」さえなければ怖くありません。蜂が飛んで来てそこに針があるから刺されるかもしれないと思うと怖いのです。でも、刺されないのなら怖がることはありません。パウロが言うことは、「**死のとげは罪だ。**」、実は、この罪、その蜂の針が悩みの種であるように、この罪が私たちの悩みの種である、私たちに苦しめるものだという事です。よく考えてみるなら、この罪が原因で私たちは永遠のさばきを自分の身に招きます。罪ゆえに私たちは苦しみます。針に刺されることによって苦しむように、針でありとげである罪は私たちに苦しめるのです。

ですから、「とげ」がなければ恐ろしくないように、もし、罪がなければ私たちは何も死に関して恐れ

ることはないのです。なぜなら、私たちは永遠のさばきに服することがない、服さなくてもよいからです。もちろん、皆さんお分かりのように、罪がないというのは罪が赦されるということです。イエスを信じて救われた人は罪がなくなったのではありません。罪が赦されたのです。それが証拠に、私たち救われた者は悲しいことに罪を繰り返します。でも、パウロが言わんとしていることは、罪が赦された人にとって死というのは永遠のさばきへの入り口ではないということです。とげを抜かれた蜂が怖くないように、罪というとげが抜かれた死は私たちに全く怖いものではないと言うのです。罪が残っていると死は恐ろしいものです。なぜなら、死んだ後、そこに待っているのは永遠のさばきだからです、苦しみが続いているからです。ところが、そのとげが抜かれていたらその死は恐ろしいものではありません。なぜなら、クリスチャンにとって死は永遠のさばきへの入り口ではなくて、永遠の祝福への入り口だからです。

だから、私たちクリスチャンは死を恐れるのではなく逆に死を喜ぶのです。そのことをまずパウロがここで教えたかったのです。もうすでにイエス・キリスト信じた者、あなたたちは勝利者なのだ。そして、あなたたちはこの死に関してこれまで恐れを持っていた、なぜなら、死んだ後そこに永遠のさばきがあることを知っているからです。罪という大きなとげ、どうすることも出来ないとげを見る時に、私に約束されて来たことは、その罪によって私は永遠に苦しみを受けること、永遠に悩み続けるということです。しかし、その問題のとげがもう除かれたのです。罪が除かれたのです。罪の問題が解決したのです。ゆえに、私は死んでもかつてのように悩みを受けることはない。これがパウロが言いたかったことです。だから、イエスを信じている人も信じていない人も同様に死を迎えますが、その先が全く違うのです。死のとげである罪が残っているか、そのとげが除かれているのか、そのことによって永遠がどのようになるのかが決まるのです。ですから、少なくとも私たちイエス・キリストを信じて罪赦されている者たちは、罪がないから死を恐れることはないのです。待望しながらその時を待つべきです。その日のために備えをなすことです。クリスチャンの皆さん、ここに私たちの感謝の根拠があるのです。

2) 罪の力は律法

56節には「**罪の力は律法です。**」とあります。パウロは「律法」ということをここで上げて、律法がもたらすものがどういうものかを教えようとするのです。確かに、このローマ人への手紙7:12では「**ですから、律法は聖なるものであり、戒めも聖であり、正しく、また良いものなのです。**」と教えています。確かに、律法は聖なるもの、神の前に正しいものです。でも、なぜ、パウロはここで「**罪の力は律法だ**」と言ったのでしょうか？律法は確かに正しいのですが、この正しい律法は私たち罪人をその罪から救うことができないのです。律法がすることは私たちに「あなたは罪のうちにいる」ということを明らかにすることです。この律法には私たちが罪から救い出す力はないのです。そこにある力とは私たちが罪の中にあって、罪の虜、罪の奴隷であり、永遠の滅びに向かっていくことを私たちに明らかにすることです。ですから、律法を見ることによって、私たちは神が何を望んでおられるのかということを知ります。そして、その律法と自分の歩みを見た時に、私たちはことごとく主に逆らっていることに気が付くのです。そのことをパウロはここで言っているのです。律法は確かに神の完全な正しい基準を示してくれるものです。しかし、だからといって私たちはそれを守れるのでしょうか？守るどころか、それを守ろうともしていない者だということに私たちは気付かされて行くのです。

3) 救いはだれによって与えられたのか

パウロはこの死に対する勝利、死んだ後永遠の滅びに至るはずの私がそこから救い出されたこと、この救いにあずかったこと、そのすばらしい恵みを覚えて感謝するのですが、この恵みがだれによって与えられたのかということをはっきり教えています。57節「**神に感謝すべきです。**」、神だと言うのです。私たちに勝利を与えてくださったのは神であり、しかも、「**主イエス・キリストによって**」と言っています。はっきりしています。私たちの功績によったものではないことをはっきり教えています。このすばらしい罪からの救い、死に対する勝利は、私たちの功績ではありません。すべて神のみわざであり、神がイエス・キリストを通して私たちに為してくださったすばらしい祝福だということを教えるのです。だから、「主を感謝しましょう。主に感謝をささげましょう。」とパウロは言うのです。ですから、最初に私たちが見ることは、このパウロは救いのすばらしさをしっかりと分かっていたということです。だから、彼は救われたことを感謝し、救いを与えてくれた主を心から称え続けているのです。問題は私たちです。パウロはそのように生きた、そして、あなたがたもそのように生きなさいと言います。あなたはどのように生きておられますか？

4) 恵みにふさわしい歩み

そして、58節のみことばを見るのですが、パウロがこの15章の中で繰り返していること、もちろん15章だけではありませんが、今15章だけに焦点を当てるなら、パウロがしていることは、神の恵みを説明した後、その恵み祝福をいただいた者としてふさわしく生きるようにとの勧めを与えているこ

とです。例えば、15:3には「**私**があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおり、私たちの罪のために死なれたこと、」と、イエス・キリストが「**私たちの罪のために死なれたこと**」が書かれています。そして、34節「目をさまして、正しい生活を送り、罪をやめなさい。神についての正しい知識を持っていない人たちがいます。私はあなたがたをはずかしめるために、こう言っているのです。」、神はこんなにすばらしい救いを与えてくださった、あなたのために喜んでいのちを捨ててあなたに救いをくださった。だから、救われた者としてこのように生きなさいと教えるのです。「**正しい生活を送り、罪をやめなさい。**」、それがこの祝福をいただいた者の務めであると教えるのです。そして、57-58節でもパウロは同じことを教えています。これまで私たちが見て来たように、私たちは勝利者であって、神によってこの死に対して勝利を得た。それなら勝利を得た者としてどのように生きて行くべきかを教えるのです。58節「**ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあってむだでないことを知っているのですから。**」、これが勝利者としてのふさわしい歩みだとパウロはここで教えているのです。

5) 勝利者としてふさわしい歩みをするために

そして、その歩みの手段をパウロはここで教えています。二つのことを見ることができます。

- a) みことばの真理に立ち続けること、みことばの真理に立つことです。
- b) みことばの真理を実践することです。

これが救われた者として勝利者としてふさわしい生き方だと言います。

- a) みことばの真理に立ち続けること、みことばの真理に立つこと

どんな時にもみことばの真理に立ち続けて生きなさいと言います。「**堅く立って、動かされることなく、**」と。私たちはしっかり主の教えに耳を傾けなければいけないし、それを正しく理解しなければいけません。15:2には「**また、もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音のことばをしっかりと保っていれば、この福音によって救われるのです。**」、私たちの信仰はよく考えた上で決心したものであるはずで、何となく雰囲気や信じたものではない、何となく信じたいと思ったからでもないはずで、私たちは自らの罪をしっかりと悟り、そして、イエス・キリストの十字架の上でなされたその身代わりのみわざをしっかりと理解し、そして、私たちは神からのチャレンジをもらったのです。神は「その罪を悔い改めてわたしに立ち返れ」と言われました。そして、私たちはその選択をしました。私たちが信じていることに関してよく考えることが必要です。なぜ、私はこれを信じているのか？なぜ、私はこれを真理だと思っているのか？と考えなければいけません。それがなければ私たちはいろいろな教えに翻弄されてしまいます。エペソ4:14に「**それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもたせられたりすることがなく、**」と記されています。書いてあります。右に行ったり左に行ったり、また、いろいろな「**人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略に**」左右されてしまうのでしょうか？それはあなたが子どもだから、霊的に子どもだからと言うのです。霊的に子どもでなければそのようなものに惑わされることはない、いろいろな出来事に対しても、神が何と言われているのをしっかりと理解している人、また、それについて考えようとしている人は、いろいろなものに流されることはないと言うのです。だから、私たちは真理に立たなければいけないのです。このことについて神は何と言われているのか、このことに関して神は何と教えておられるのか、そのことをしっかりと知ることが必要です。

クリスチャンの皆さん、もし、あなたが本当に救われたことを喜びとしているなら、あなたを救ってくださった神のみこころにしっかりと従い続けて行くことです。それが神にふさわしい感謝の現わし方です。神が言われることを受け入れて救いにあずかった者たちは、その神が言われることに喜んで従い続けて行くはずで、私たちはみことばをしっかりと高く掲げて、このみことばの權威に従って、みことばの教えに従わなければいけないのです。私たちがどう思うかではない、人間の伝統がどうであるか、習慣がどうであるかではない、みことばはそれを超越したものです。神のメッセージです。それが主にに対して感謝を抱いている者たちの正しい歩み方だと言うのです。

- b) みことばの真理を実践すること

58節に「**いつも主のわざに励みなさい。**」とある通りです。いつも、主に対して熱心であり続けなさい、主に対して忠実に歩み続けて行きなさいと。このようにクリスチャンは歩んで行くと言います。パウロがこの歩みに関して、三つの例えをもって信仰者の歩みを教えている所があります。Ⅱテモテ2:3-6を見てください。「**キリスト・イエスのりっぱな兵士として、私と苦しみをともにしてください。:4 兵役についていながら、日常生活のことに掛かり合っている者はだれもありません。それは徴募した者を喜ばせるためです。:5 また、競技をするときも、規定に従って競技をしなければ栄冠を得ることはできません。:6 労苦した農夫こそ、まず第一に収穫の分け前にあずかるべきです。**」

◎信仰者の歩み

- (1) 兵士として

3-4節「キリスト・イエスのりっぱな兵士として」と、まず、兵士の例えをもって彼は信仰者はこのように生きるべきだと教えるのです。ここにはキリストの兵士として三つのことが教えられています。

(a) 勇敢であれ＝「私と苦しみをともにしてください。」とあります。2：9には「私は、福音のために、苦しみを受け、犯罪者のようにつながれています。しかし、神のことは、つながれてはいません。」とあり、信仰者として大変な困難、迫害、苦しみを経験していた、そのパウロが言うのです。「りっぱな兵士として、私と苦しみをともにしてください。」と。このような苦しみの中を歩んで来たパウロが、最後に記したこのテモテへの手紙第二の4：7で「私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。」と言っています。聖書のどこを見ても、信仰者として主に忠実に従い続けて行くことは楽な容易い歩みだとは記されていません。却って、それは大変な歩みであると私たちに教えています。だから、信仰をもったなら万事が楽しく喜びばかりで問題がないなどというのは大嘘です。イエスを信じることによって、私たちは逆にいろいろ問題と思えることを経験します。だから、私たちはキリストの兵士だと言うのです。戦場に出て行って、そこで快適な生活が待っているなどとだれも考えません。そこにあるのは戦いです。兵士たちは覚悟をもって行きます。私はそこに行って、その敵前から逃亡することなく兵士として勇敢に戦い続けると。私たちも信仰者として、どんな問題があろうとどんな戦いがあるかと、妥協することなく、苦しみから逃げ出すこともしない、私たちが主の兵士であるゆえに、その主に従い続けて行くのです。

(b) 忠誠であれ＝ローマ兵としてその働きに就くときに彼らがすることは、皇帝への忠節の誓いを宣言することです。つまり、兵士は「私はこの皇帝のためだけにこの国のためだけに生きる」決心しなければいけないのです。だから、そういう人たちは二心をもっていません。パウロは言います。「あなたは兵士だ」と。兵士に必要なことは、主に対する忠誠心であって、それは「この世と妥協しないこと」を意味します。私たちがこの世を愛する生き方から贖い出された者であって、この世に心を奪われられないのです。ですから、Ⅱテモテ2：4に「兵役についていながら、日常生活のことに掛かり合っている者はだれもありません。それは徴募した者を喜ばせるためです。」とあります。兵士はその務めだけに一生懸命務めるのです。兵役についていながら今日何の買い物をしようかなどとは考えません。今日、この後どのように楽しもうかなどとは考えていません。この戦争がいつまで続くか分からないからです。

ジョン・マッカーサー先生はこのように言っています。「レジャーとリラクゼーションは現代における二つの偶像である。多くのキリスト者たちがかなり自分から進んでそれらに膝をかがめているように思える」と。もちろん、休息は必要です、リラックスすることは必要です。でも、私たちは兵士であることを忘れてはならないのです。私たちがこの地上にあって快適さを求めて生きる者ではなく、この地上にあって戦いをしていると言うのです。主に対してしっかり忠誠を誓った私たちが、そのように歩み続けているかどうか、他の所に目を向けていないかどうか、私たちがしっかり吟味しなければいけません。

(c) 専心せよ＝4節に「それは徴募した者を喜ばせるためです。」とあります。私たちが主に対して忠節を誓っただけではないのです。私たちがこの主を喜ばせることだけ、それだけに専心するのです。なぜなら、兵士はそのように生きているからです。Ⅱコリント5：9に「そういうわけで、肉体の中であろうと、肉体を離れていようと、私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです。」とあります。また、エペソ5：10ではパウロはこのように言っています。「そのためには、主に喜ばれることが何であるかを見分けなさい。」、ですから、パウロが私たちに教え続けていること、みことばが私たちに教えていることは「主に喜ばれることが何かをいつも考えて、それを選択しなさい」ということです。兵士は自分の司令官に対して、その方に喜んでいただくために一生懸命その務めを果たそうとします。それなら、私たちが贖ってくださった主を喜ばせるために生きる生き方へと生まれ変わった私たちは、当然、その主に喜んでいただくことをいつも考えながら、その選択を継続し続けるはずです。

キリストの兵士であるとパウロは教えました。

(2) 競技者として

二つ目の例えはⅡテモテ2：5に「また、競技をするときも、規定に従って競技をしなければ栄冠を得ることはできません。」とあるように「競技者」です。クリスチャンは競技者であると言うのです。

(a) 規定に従って競技する＝実は、この当時、彼ら競技者はいくつかのことを誓う必要がありました。その中の一つはローマの神であるジュピターの前で「10ヶ月間練習をします」と誓うことでした。それを破った時には必ず厳しい罰があったのです。ですから、規定に従って競技をするということはその当時の読者たちによく分かったことでした。それなら、私たちが規定に従って行こうとするなら、私たちが常に神のおことばに従って歩むはずで、競技者である信仰者の皆さん、あなたも一生懸命頑張ることは良いことかもしれませんが、ルールに従っていなければ無駄です。どんなに一生懸命訓練をしても、鍛錬して競技のために備えても、ステロイドをするなら違反なのです。ルールから外れたなら、どんなに一生懸命してもそれは空しいのです。私たちが信仰者が信仰者として歩んで行くために必要なこと

は、自分勝手な解釈で「一生懸命主に仕えます」と言うことではなく、神のルールブックである神のおことばに添って生きることです。パウロはローマ10：2でこのように教えています。「私は、彼らが神に対して熱心であることをあかしします。しかし、その熱心は知識に基づくものではありません。」。

(b) 最善を尽くす＝しかも、競技者はその練習においても試合のための準備においても、常に、一生懸命最善を尽くすことが必要です。0コンマ何秒でも速くなろうと思うなら決して手を抜きません。私たち信仰者も同じように、勝利を得るために最善を尽くすことです。パウロはピリピ3：13-14で「兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕えたなどと考えるはしません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、：14 キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。」と語っています。パウロが言うことは「私は競技者として前のゴールを見て一生懸命に走っている。疲れるけれど、その疲れた自分を打ち打って、前のものに向かって栄冠を得るために、勝利を得るために走り続けている」ということです。あなたは信仰者としてしっかりと熱心であるかもしれませんが、その熱心さは神のみことばに従った熱心さでしょうか？また、あなたは主のために最善を尽くしていますか？

(3) 農夫として

6節「**労苦した農夫こそ、まず第一に収穫の分け前にあずかるべきです。**」、農夫は勤勉な人です。どんな時でも彼らは勤勉にその務めを果たそうとします。怠け者ではないと言うのです。毎日毎日、その務めを果たそうとしています。皆さん、このIIテモテ2章でパウロは面白いことを語っています。信仰者はこのように歩むべきだと三つの例えをあげたその後、この2章の後半を見ると、20節に「**大きな家には、金や銀の器だけでなく、木や土の器もあります。また、ある物は尊いことに、ある物は卑しいことに用います。**」、家の中にはいろいろな食器がある、尊いことに用いる物もあるし、そうでないときに用いることもある。特別なお客さんが来たとき、大切な人が来たときに用いる器もあれば、ゴミを出したり汚いことに用いるような器もあると、その二つを比較しているのです。「**ある物は尊いことに、ある物は卑しいことに用います。**」。21節「**ですから、だれでも自分自身をきよめて、これらのことを離れるなら、その人は尊いことに使われる器となります。すなわち、聖められたもの、主人にとって有益なもの、あらゆる良いわざに間に合うものとなるのです。**」、ということ、あなたは今まで見て来たように、兵士として競技者として農夫として一生懸命主に仕えているかもしれない。しかし、忘れてはならないことは「罪から離れることだ」と言うのです。罪から離れることによって、特にこの22節を見た時に「**それで、あなたは、若い時の情欲を避け、きよい心で主を呼び求める人たちとともに、義と信仰と愛と平和を追い求めなさい。**」と、ここで言われている罪は性的な罪だけでなく、ありとあらゆる罪です。自分のうちにある様々な自慢、プライドであったり、また、怒り、ねたみ、憎しみ、不信仰、争いなど、そのようなあらゆる罪を捨てなさいと言うのです。そうでなければ、神にとって有益なものにはならないと言うのです。罪を犯しながら、他の人よりたくさんこのだけの働きをしているから、主はきっと私のことを大目に見てくださる…、とんでもない！神はその罪を憎んでおられます。その罪から離れなさいと言われます。「これは悪いことだけれどこの人たちが悪いからこのようなことになってしまった」と…、それも間違っています。「**悪はどんな悪でも避けなさい。**」とパウロはIテサロニケ5：22で言いました。また、ローマ12：17、21では「**:17 だれに対してでも、悪に悪を報いることをせず、すべての人が良いと思うことを図りなさい。…:21 悪に負けてはいけません。かえって、善をもって悪に打ち勝ちなさい。**」とあります。どのような悪を行われても、あなたの責任は神の前に正しいこと、神が喜んでくださることを行ない続けて行くことであって、その時に「あなたは神にとって役に立つ者になる」と言うのです。

みことばの教えは明確です。私たちは一生懸命主のために仕えて行くことが必要です。熱心に主に仕えて行くことが必要です。しかし同時に、私たちはしっかりと自らの内側から罪を取り除いて行くことです。どんなに熱心でも、どんなにすばらしい働き人でも、罪をもったまま主に喜ばれることはあり得ません。

B. 主の報い 58b節

コリント人への手紙第一に戻って、最後の所を見ましょう。58b節「**あなたがたは自分たちの労苦が、主にあってむだでないことを知っているのですから。**」、最後にパウロが言うことは「主の報いがある」ということです。勝利を与えられた者であるあなたは、それにふさわしい歩みをして生きなさい、そうすれば、必ず主はあなたに対してすばらしい報いを与えてくださると言います。「**自分たちの労苦が**」とあるこの「**労苦**」は、私たちが何度も見ていることばですが、「**疲れ果てるほどの労働**」です。疲れ切るまで働くということ、心身を使い尽くして苦勞するということです。つまり、パウロが言っているのは、あなたが一生懸命主のために労苦するなら、様々な問題や迫害の中で一生懸命主に従い続け、みことばに従い続けて行くなら、必ず、主はあなたのその歩みを祝してくださる、それにふさわしい報いを与えてくださる、「**むだでない**」ということ。神のために生きる人生はむだにはならないと言うのです。主の

前に立つ時に、落胆することは絶対ないと言うのです。「こんなに一生懸命主のために生きて残念だった」などということは絶対ないと言うのです。主は、あなたの心から成す主に対するすばらしい働きに対して、主はそれを覚えて「それにふさわしい報い、褒美をくださる」と言うのです。もちろん、私たちクリスチャンは褒美をいただくために生きているわけではありません。私たちはもう、神からすばらしい報いをいただいたのです。それは罪の赦し、死に対する勝利です。私たちは死んでも主とともに生きるのです。その祝福をいただいている者、私たちはその感謝を現わすのです。

でも、感謝なことに、驚くべきことに、そのような歩みに対して主は報いを与えてくれると言うのです。どんな迫害や困難の中でも、また、人から嘲笑されても、主を見上げて従順に従い続けたことは、神は絶対に忘れていないのです。みことばの実践に真剣に努めたあなたのことを神は忘れていないのです。主を信頼できないほどの苦しみや絶望で心がいっぱいになった時でも、しっかりと主に信頼を置いて歩み続けたことを、主は絶対に忘れないのです。熱心に人々に福音を語り続けたことも、家族の救いのため、また、彼らを見ことばに沿って導くために労していることも、主に従い、そして、主に喜んでいただくように生きたその生き様も、献身的に主に仕えた奉仕も、犠牲的にささげたささげ物も、すべて主は覚えておられると言うのです。**「植える者と水を注ぐ者は、一つですが、それぞれ自分自身の働きに従って自分自身の報酬を受けるのです。」**とIコリント3：8のみことばです。また、ガラテヤ6：9では**「善を行なうのに飽いてはいけません。失望せずにいれば、時期が来て、刈り取ることとなります。」**と書いています。みことばは私たちに繰り返し教えています。神はあなたの行ないに対して正しい報いを与えてくれると。感謝だと思いませんか？神は私たちを罪から救って、このようなすばらしい祝福を与え、勝利者としてくれたのです。そして、私たちが勝利者として神に従い続けて行くなら、その行ないに対して、神はすばらしい報い、祝福をくださると言うのです。

神はどこまで恵み深いのでしょうか？このようにどうしようもない罪人をこのように扱ってくださるのです。クリスチャンの皆さん、私たちはもっと主に感謝しなければいけません。私たちが勝利者としてくださった神へのその感謝は、勝利者にふさわしい歩みを成すことによってのみ現わすことができます。そのように生きることです。そのように生きて、神にあなたの感謝を現わし続けて行くことです。